

令和 7 年度

東京学芸大学附属小金井中学校

公開授業研究会（二次案内）

研究主題

「学び問い続ける」生徒の育成
—世界に私として存在するために—

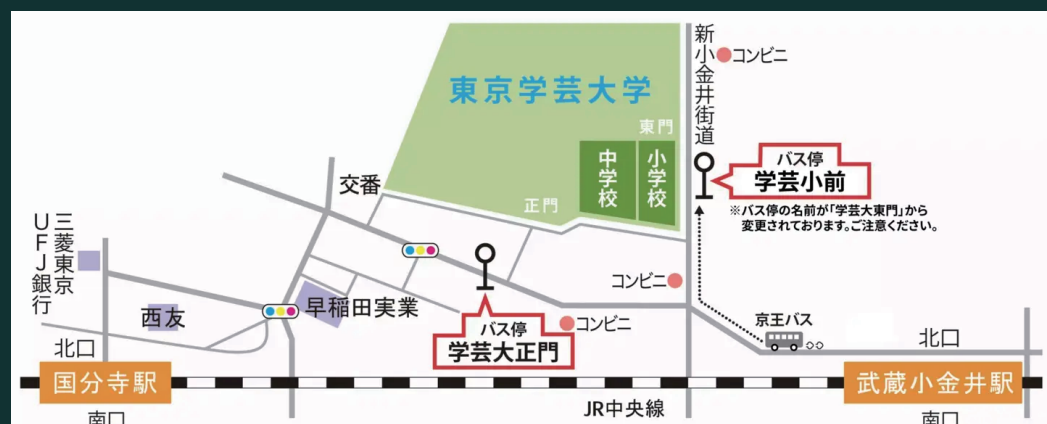
令和 7 年 11 月 21 日（金） 12:30～受付開始

受付開始	全体会	移動	公開授業Ⅰ （国社数理音英）	移動	公開授業Ⅱ（英）	協議会
12:30	13:00	13:30	13:45	14:35	14:50	16:50

本校ホームページにて、事前の申し込みの受付を実施いたします。
別日開催の授業セミナー（体育）については、実施 1 か月前より
申込の受付を開始します。

詳しくは本校ホームページをご確認ください。

参加費 無料



〒184-8501 東京都小金井市貫井北町 4 丁目 1 番 1 号

TEL 042-329-7833（代表）（担当：数井） Mail kaneken@u-gakugei.ac.jp

小金井中

検索

○公開授業Ⅰ（13：45～14：35）

教科	対象学級	授業者	授業主題
国語	3年D組	愛甲 修子	「わからない」から、世界を見る―魯迅「故郷」―
社会	3年C組	田崎 義久	除染土の利用拡大に向けて
数学	1年B組	柴田 翔	空間図形―立方体をどう見るか、どう表すか―
理科	3年B組	宮村 連理	ビースタの主体性とアーギュメンテーションの比較検討 ～斜面を落下する台車の実験から～
音楽	3年A組	田川 聖旨	アレンジやコードネームの学びを活かした合奏活動
英語	1年D組	荻原 真也	生徒のエンゲージメントを高める授業の工夫

○授業Ⅱ（14：50～15：40）

英語	3年B組	澤井 亜美	伝える力と聞く力を高める表現活動の工夫
----	------	-------	---------------------

○協議会（14：50～／15：50～）

教科	教科主題	講評
国語	「学び問い続ける生徒」を育てる国語の授業(二年次)	工藤 哲夫(白鷗大学) 田中 成行(元岩手大学)
社会	学び問い続ける生徒の育成(二年次)	荒井 正剛 (元東京学芸大学教授)
数学	空間を観る目を育てる探究の追究 ―「世界」との相互作用を通して生じる問いに着目して―	太田 伸也 (東京学芸大学名誉教授)
理科	科学的根拠を持って「問い」を見出す授業の研究	和田 一郎 (横浜国立大学教授)
音楽	他領域での学びを相互に活かした表現・鑑賞活動の研究	渡辺 行野 (文京学院大学准教授)
英語	生徒が自分の考えや気持ちを伝えようとする授業の工夫	白倉 美里 (東京学芸大学准教授)

○授業セミナー(別日開催)

教科	実施日程 対象	授業者	授業主題
保健 体育	11月29日(土) ※実践発表	直井清貴 (体育分野)	技能の転移を目指した牽引法の開発を目指して
保健 体育	12月4日(木) 2学年	福岡由唯 (保健分野)	様々な状況を想定した応急手当の実践
美術	1月15日(木) 2学年	大根田 友萌	「問いを見出す力」に働きかける「問い」との出会い

「学び問い続ける」生徒の育成を目指した校内研究の在り方

(東京学芸大学附属小金井中学校 研究部)

今年度の公開授業研究会の二次案内の参考資料として本紙を添付いたします。これは公開授業研究会に至るまでの校内研究のプロセスをまとめたものです。現場の教師が、子どもの実際の中で教育課題を捉え、より良い教育の在り方を模索し、授業改善に取り組むとはどういうことか。教科の枠を越えて教育の本質を議論し、現場で探究し続ける教師集団であるために必要なことは何か。教師自らが協働的に試行錯誤しながら教育研究に取り組む過程を一事例として公開することで、校内研究の在り方について、皆さまから広くご意見を頂戴できれば幸いです。

1 研究主題の設定(昨年度)：「学び問い続ける」生徒の育成

昨年度は各教科において日々の生徒の実態や指導上の悩み・課題を出し合い、全体で共有することから校内研究をスタートした。

- ・「全体での探究に乗れない生徒がいるが、どうすればよいか」
- ・「個別の興味が広く、授業の中でその要望にどこまで応えられているか」
- ・「教科の学びが社会課題の解決に生きてくるようにしたい」

これらの悩みや課題から、生徒の多様な学びの尊重や社会との繋がりに、本校教員の問題意識があることが明らかになった。その上で、生徒たちに身に付けさせたい力について議論したところ「主体的な学び」に関する力が多く挙げられたため、学校経営方針や社会の動向も考慮して、校内研究の主題を『「学び問い続ける」生徒の育成』とした。探究的な学習への関心が集まる中で、生徒が学習活動の中で自らが問いを持ち学習に関わること、仲間との学び合いを通して学ぶことの面白さを体験し、教科の学習と実社会とを結びつけられるような探究的な思考を育むことを目指すことになった。

さらに、具体的な生徒の姿を次のように想定した。

- ①学んだ知識や概念を振り返りながら、新たな問いを創造していく。
- ②問題を解決する中で、解決に必要な考え方、捉え方は何かを問う。
- ③実物に出会う体験を通して学び、そこから新しい自らの問いが生まれる。
- ④答えのない問いを追究することを通し、葛藤を生起させ、新たな視点を得る。

昨年度は、これらの姿をもとに各教科における「学び問い続ける」生徒の姿を想定し、公開授業研究会や紀要において授業提案を行った。

2 研究主題を深めるための観点をどうするか(4～5月)：生徒の「問い」

「学び問い続ける」ための授業を実際の生徒の姿とともに提案できたことが昨年度の成果である。だが、研究主題の解釈や視点が教科間で大きく異なるという課題も明らかとなった。そのため今年度

の校内研究では、主題のより詳細な定義や価値観の共有を目指し、より深く議論していくことになった。研究部では東京学芸大学教育心理学の松尾直博先生、教育方法学の渡辺貴裕先生、教育史学の橋本美保先生に相談し、校内研究の方向性について多くの示唆をいただきながら、関連書籍を読み進めるとともに生成 AI 導入にも着手し、研究主題を深めるための観点について議論を重ねた。結果として、今年度は「生徒の問い」を観点に、「学び問い続ける」という主題を深めていくことにした。

学習指導要領における総合的な学習の時間では、探究の学習過程として「①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現」が示されているが、最も指導が困難とされるのが「①課題設定」である。実際、校内研究会でも各教科の実践を紹介し合った際、生徒の問いに関わる疑問や意見が多く出されていた。「学び問い続ける」生徒の姿をより精緻に捉えるために、「生徒の問いはどのように生成、変容するのか」という観点から、今年度の授業研究を進めることにした。

3 「問い」とは何か(5、6月)：本校における定義

では、そもそも「問い」とは何なのか。「問い」の根本を考えたとき、それは簡単には説明できず、哲学の領域にまで踏み込んで考える必要があることに気づいた。そこで改めて昨年度に想定した「学び問い続ける」生徒の姿に立ち返り、私たちが実践の中で捉えてきた「問い」を、「本校の授業研究における問い」として定義することにした。

- ①学んできた過去と、学んでいく未来をつなぐ結節点としての現在の自分の課題
- ②解決に向けた道筋や手段を多角的に求めてゆく思考過程
- ③価値観や常識が揺さぶられることで生起する疑問や問題意識
- ④研究テーマ、オープンエンドの課題意識

これらの定義を踏まえ、本校の主題研究においては学び手の意欲や問題意識を引き出すもの、思考の起点、あるいは探究的な学習の軸となるものを「問い」と呼ぶ。問題、質問、疑問、課題、課題意識、問題意識、テーマ、目標などを総称して「問い」として扱うことにした。言語化できない興味や関心も含めて、生徒自身が「問う」過程に焦点をあて、生徒の内面で問いを生成し、広がり、深化する授業を目指す。

4 生徒の「問い」の実際(7月)：第1回授業研究会

教科を越えて議論するために、総合的な学習の時間を対象として生徒の問いの実際を観察した。本校では各学年で修学旅行を実施している。2学年の秩父長瀬修学旅行では、地質や産業、文化などのテーマから自分の興味・関心に応じて探究のテーマを選択し学習を進める。授業研究会では、生徒たちが事後学習のまとめを発表する様子を観察した。

授業研究会で成果として挙げたのは、生徒たちが事前学習を経て現地で実物に出会い心動かされ学びを深めていたことである。実物と出会い身体として実感することの重要性、そして抽象的な概念としてではなく、実際に自ら現地に行き具体的に記述することの意義を改めて確認できた。だが、問いを書いている生徒が少ないという課題も明らかになった。その原因を話し合うなかで、生徒が選んだテーマで学習は深まっていたのか、教師はどう指導すべきだったのかという問いも出た。これらの問いの背景には、生徒自身が学びたいことをテーマとして選ばせたいが、教師が学ぶべき内容を示す必

要もあるのではないかと教師側の葛藤があった。生徒個々の興味・関心に応じテーマを設定し、それぞれのペースで探究を進めることが理想だが、限られた時間と教員数で、一人ひとりの学習を十分に保障することは容易ではない。適切な伴走がないまま探究の場を設定するだけでは、生徒によっては表面的な作業をこなすだけで、すべき体験ができないまま、あるいは体験を深めることができないまま学習を終えることとなり、学習格差が広がる。また、せっかくフィールドに出るのであれば、教師としてこれを見せたい、考えさせたい、学ばせたいと願う気持ちもある。生徒の主体的な学びを保障しながら、教師が教えるべきことをどのように教えていくのか。生徒の問いを捉えようとする前に、そもそも生徒の内側に問いが生まれる授業とはどのようなものか、そして問いの生成・変容の過程に、教師はどう関わるべきなのかという問題に直面した。

5 文献をもとに輪読会で議論する(8月)：ビースタ『世界中心教育』

授業研究会によって、「学び問い続ける」生徒の育成という主題を深めていくためには、「生徒の問いはどのように生成し、変容するのか」という観点ではなく、「問いが生成し変容する場をどうつくるか」という視点が重要であることに気づいた。このような課題意識を踏まえて、生徒の問いが生まれ、育っていくための「場」の設計や教師の役割とは何かという観点で、研究主題を考えていくことになった。参考文献としたのは、ガート・ビースタ(Gert,Biesta)『World Centered Education A View for the Present』(2021)である。夏季研究会では、本書の輪読会を通し「学び問い続ける」ことの本質的な意味やそれを支える価値観について教科を越えて議論した。次の4点が中心的な話題となった。

(1)教育を子ども中心でも、カリキュラム中心でもなく、世界中心にすることについて。

次世代の子どもたちが世界の中に、世界とともに存在し、彼ら自身の権利でできるよう、教育し、奨励する。それは自然的・社会的な世界が、私たちができることに制限を課すのを認めることであり、民主主義の問題であると同時にエコロジーの問題でもあると本書には書かれている。私たち教師は、どのようにすれば、子どもたちが自分の主体性を「引き受ける」ように促し、子どもたちが自分の人生の主体として存在できるように手助けすることができるだろうか。

(2)知識を与えるのではなく、知識が意味を持つ枠の中に生徒を引き込むことについて。

本書には、教育の仕事は、生徒が求めるものを与えるだけでなく、生徒が求めていなかったもの、探していなかったもの、探していることにさえ気づいていなかったものを与えることだと書かれている。さらに、真理を与えるだけではなく、「真理として認識するための条件」を与えなければならない、主体性は自分で構築するものではなく、私たちが出会い、与えられるものによって引き出される、受動性が主体性を可能にするという記述もある。教師は、どのようにして生徒を真理が意味を持つ枠の中に引き込んでゆけるだろうか。

(3)社会が必要とする学校ではなく、学校がどんな社会を必要とするかを問うことについて。

教育には、「主体化」の役割の他に、子どもたちを伝統や文化へと方向づける「社会化」の役割や、「生きるための装備」を提供する「資格化」の役割もある。現在は「資格化」が教育の中心を占めているために、学校が子どもたちを客体化・対象化し管理することになっているとビースタは指摘する。

そうならないための学校とは、どのような場であるだろうか。教師の意識はどうあるべきか。

(4) 子どもたちの欲望について

ビースタは、現代は衝動社会であり、消費者の欲望と一致する仕組みをつくることで利益を得る社会だと指摘した上で、教育の仕事は、子どもの欲望に抵抗を与え、彼らが欲望に左右されるのではなく、欲望との関係を築くために、個人や集団の欲望について熟考し、社会全体がどの欲望を担えるか、そしてどの欲望は担えないのかを見極めることができるようにすることだと主張している。そのために私たち教師は子どもたちに対して、どのような指導・支援ができるだろうか。

6 輪読会をもとに授業を構想する(8～10月)

輪読会は、本書を土台として「学び問い続ける」ことの本質的な意味や、それを支える価値観として、教育の目指すところ、教師の役割、そもそも教育とは何かについて、一人ひとりの教員が考えることを出し合う場となった。ビースタは教育を「徹底した実践芸術である」と言う。各教科の特性や生徒の実態をどう判断し、創意工夫して、唯一無二の授業を紡ぎ出してゆくかは、学校現場の渦中にいる私たち一人ひとりの教師に任されている。

現在は、夏期研究会での議論を踏まえて、各教科の本質を軸に具体的な授業構想を練っている段階である。生徒たちにどのような世界を見せるか。それによって生徒の内面に問いが生成し、変容するのか。「学び問い続ける」生徒の育成に向けて、各教科で授業プランを出し合い、教科を越えて、授業の実践において成果と課題を観察し合いながら、授業改善や検証を進めている。

7 研究主題の再設定：「学び問い続ける」生徒の育成—世界に私として存在するために—

探究は、予測困難な時代を主体的に、学び問い続けながら生きていくために必要な学習活動として求められている。しかし現状、「学び手自身が自らの学習を立ち上げ推進する姿をいかに実現するか」という課題を抱えたまま、各学校で悩みながら試行錯誤を続けているのが実情である。このような状況を踏まえ、本校では研究主題を「『学び問い続ける』生徒の育成—世界に私として存在するために—」と設定し、各教科において探究に必要な問う力を育成する授業研究を進めている。今年度は特に、探究プロセスの中でも「課題設定」の前提となる問いに焦点をあてる。最終的には教科と総合的な学習の時間を相補的に機能させることを目指す。

授業研究を進めるにあたり、今年度はガート・ビースタ（2021）『世界中心教育（World Centered Education: A View for the Present）』に着目した。ビースタは教育を単なる知識や技能の伝達ではなく、生徒の注意を世界に向ける行為として捉えている。教師は生徒に自然的・社会的な世界を指し示し、生徒は世界と関わりながら「自分がどのように存在するのか」を考えるのである。本校では、このような「世界における主体化」を試みる過程において、一人ひとりの内面に問いが生成されると考える。そして生徒自身が、その問いを通じ「学び問い続ける」力を身に付けていくことを目指す。公開授業研究会では、その取り組みを提案する。